自分自身のイノベーション

Q「研究分野もしくは、担当科目の魅力」

私が担当する科目の１つに「イノベーション論」があります。イノベーション(innovation)は革新や刷新と訳されますが、企業経営との関係で具体的に示すと「新しい製品やサービスの開発」、「新しい生産方法の確立」、「新しい市場の開拓」、「新しい供給源の獲得」、「新しい組織の実現」などといった意味になります。皆さんもイノベーションという言葉を耳にしたことがあるのではないかと思います。例えば、テレビのコマーシャルで、NECは「empowered by innovation」、東芝は「leading innovation」、ダイハツは「innovation for tomorrow」、東レは「innovation by chemistry」のようにイノベーションという言葉を含んだキャッチフレーズを用いています。

企業にとってイノベーションが重要なのは、それが企業の存続･成長･発展にとって決定的な要因となるからです。企業を取り巻く環境は変化し続けます。例えば、地球温暖化の問題を企業は避けて通ることができません。このような状況下で、自動車メーカーがハイブリット車や電気自動車、燃料電池車などを開発し販売するのは、まさにイノベーションということができるでしょう。いずれにせよ、上述したように環境は常に変化しますから、企業も変化し続ける、あるいは、環境に先行して変化を生み出すことが必要になるのです。

ここまで、企業におけるイノベーションの重要性について述べてきましたが、イノベーションを必要とするのは企業だけではありません。我々個人もイノベーションを必要とします。つまり、高校までの自分と大学生になってからの自分が全く同じであるというわけにはいきません。自分自身が成長するためには、個人のイノベーションが必要となるのです。講義では企業を前提として話を進めますが、それを自分に当てはめて考えると面白いのではないかと思います。講義が新たな自分自身発見の一助になればと思います。

■経営戦略論　■戦略的経営論
■ベンチャービジネス論

関根 雅則
（せきね　まさのり）

1997年明治大学大学院博士後期課程単位取得。同年高崎経済大学経済学部に講師として就任。2009年から教授。現在の担当科目は、イノベーション論、ベンチャービジネス論、経営戦略論、戦略的経営論。

Q「その分野もしくは、科目を志したきっかけ」

私がイノベーションの分野を志すようになったきっかけは、大学時代のゼミの先生がイノベーションをテーマとして研究、講義していたからです。最初はイノベーションの意味もよくわからずに勉強していたのですが、ゼミや講義を通じてイノベーションの重要性が徐々に理解できるようになりました。そのうちに、イノベーションというのは企業だけに重要なのではなく、一個人にとっても重要なのだと考えるようになりました。

高校までの私は陸上部に所属していました。勉強はそっちのけで毎日毎日練習に打ち込んでいました。結果的に努力の甲斐あってインターハイや国体に出場できました。そして、当時はそういう自分に満足していました。つまり、陸上競技が自分自身の生活の支柱となっていたのです。しかし、それも高校生までの話。高校を卒業すると生活の支柱を失い、何をやっていいのかわからなくなってしまいました。結果的に、勉強を全くしていませんでしたので大学には入れず浪人することになったのですが、いずれにせよ、陸上競技に変わる新たな支柱をずっと見つけることができませんでした。そのような状況の中で、イノベーションをテーマとするゼミに入り勉強することになったわけですが、そこで初めて個人にとってもイノベーションが重要なのだということを悟りました。つまり、新たな生活の支柱を確立することの必要性に気づいたのです。

以上のような経過を経てイノベーションについて真剣に研究してみようと思い、大学院に進学しました。結果的に大学の先生になることになったわけですが、今ではイノベーションと関連する科目としてベンチャービジネス論や経営戦略論を担当しています。いずれの科目も軸になっているのはイノベーションで、私の講義やゼミを通じて一人でも多くの学生さんにイノベーションの重要性を理解して頂ければと思っています。